「大龍柱」永津氏寄稿について

３月15、16日付の本紙文化面に掲載された琉大名誉教授の永津禎三氏の寄稿「首里城大龍柱　技術検討委への指摘」で相手の名誉を傷つけるような表現がありました。この寄稿に対する、首里城復元に向けた技術検討委員会委員を務める安里進氏の意見を掲載します。

論争ゆがめる誹謗中傷

安里 進

研究者にとって、自分の論文が「捏造」だと訴えられることは、失職につながる脅威だ。私の場合は、名誉教授の称号を剥奪されて社会的信用を失うことになる。しかも新聞紙上で訴えられるとその影響は計り知れない。

首里城復元の大龍柱をめぐって「正面向き復元」と「向き合い復元」の２つの学説が対立している。３月16日の本紙に、「正面」を主張する永津禎三氏（琉球大学名誉教授）が、「向き合い」を妥当とする私の論文に対し、「データ改ざん」「捏造」だとする誹謗中傷文を寄稿した。新聞に掲載されると次は、沖縄県立芸術大学と、私を首里城復元の委員に委嘱した沖縄総合事務局に対して、論文不正調査委員会の設置を要求している。この行為は、論争相手の社会的信用を失墜させることで、自説の正当性を印象付けようとするものだ。

ところが、６月１・２日の本紙で私が永津氏の論理矛盾を指摘すると、永津氏は沖縄総合事務局に「私の見解が誤りであった」とわび状を送り「捏造」は間違いだったと認めた。沖縄県立芸術大学と琉球新報社にも同様なおわびを伝えたようだ。この経過については、永津氏が会長を務める「琉球美・造形研究会」で永津氏自身が説明し、その全文を自身のブログに掲載している。ブログには、「研究者として謙虚な姿勢で臨みたい」という言葉や新聞読者へのおわびはあるが、私への謝罪はない。

誹謗中傷や威嚇は、論争をゆがめるだけで大龍柱の歴史解明にはつながらない。

経緯

３月15、16日付の本紙文化面に掲載された永津禎三氏の寄稿「首里城大龍柱技術検討委への指摘」で、永津氏が首里城復元に向けた技術検討委員会の「報告会資料」にある「大龍柱のトグロ巻部の展開図」を「改ざんデータ」としたのは、永津氏の誤った認識の下での見解でした。

報告会資料は、同検討委員の安里進氏が平成の首里城復元を検証し、まとめました。永津氏は寄稿で、誤った認識の基に安里氏のトグロ巻部の展開図を「ねつ造」「不正行為そのもの」と強く批判しました。

しかし、永津氏は、６月に掲載された安里氏の応答原稿で「新写真資料」が提示されたことを受け、自身の認識の誤りを本紙に認めました。

琉球新報 2022年9月28日